

2021年11月14日聖霊降臨後第25主日説教

ダニエル書 12章 1-4節 a

ヘブライ人へ手紙 10章 31-39節

マルコによる福音書 13章 14-23節

本日は、聖霊降臨後第25主日です。本日が連続してマルコ福音書を読む、最後の主日となります。来週は、聖霊降臨後最終主日ですので、降臨節前主日として聖書日課が選ばれているからです。再来週の11月28日は、降臨節第一主日です。教会の歴としては、新しい年が始まります。ちょうどその日が、主教巡回日となりました。高橋宏幸主教の司式・説教の礼拝の中で、牧師就任式と堅信式が行われる予定です。その主日は、あるいはその主日からAB合同で礼拝をとと思いますが、本日の教会委員会で最終決定し、皆さまにご案内いたします。

さて、本日の旧約日課と福音書の主題は、「最後」または「終わり」ということができます。旧約日課は「ダニエル書」ですが、こちらは〔かつこ〕の中も含めれば、「ダニエル書」全体の最後の部分です。この「ダニエル書」は、預言書に含まれていますが、内容としては、黙示文学という分類に含まれます。この黙示という言葉は、すこし分かりにくい事柄です。主なる神様の意志を伝えるという意味では、預言と同じですが、預言が、主なる神様の意志を、誰でも分かるように伝えるのに対して、黙示は、分かる人にだけ分かるように、言葉を換えて伝えます。そのような黙示という表現が生まれた背景には、イスラエル・ユダヤ人またはユダヤ教に対する激しい迫害があるとされています。黙示は、主なる神様を信じることを禁じられる迫害の中で語られたのです。

「ダニエル書」が書かれた年代は、諸説ありますが、紀元前2世紀の中ごろと考えられます。『旧約聖書』の中では一番新しく、『旧約続編』の時代に近い文書と言えます。歴史の流れでいえば、紀元前6世紀に、バビロン捕囚がペルシャによって終わります。そのペルシャは、紀元前4世紀に、アレクサンダー大王によって滅ぼされます。しかし、アレクサンダー大王の支配は、一瞬にして終わり、イスラエルの地方は、エジプトの支配下にはいります。ペルシャとエジプトの支配の時代は、国家としてイスラエルは、回復したわけではありませんが、神殿の再建などがあり、比較的平和でした。しかし、エジプトの後、支配者となったシリアによって、イスラエル・ユダヤ人たちは、過酷な迫害を受けます。「ダニエル書」は、この時代に書かれたと考えられるのです。そのような、迫害の時代に書かれたわけですから、そこには、なぜ、神の民であるわたしたちが苦しめられるのか、という問いかけがあります。そしてその問いに対する主なる神様の答えが、黙示という形で、ダニエルを通して与えられているのです。

そのような主なる神様へ問いかけは、信仰とはなにか、何のために主なる神様を信じているのか、そのような本質的な事柄を問うこととなり、そこから「終わり」という概念が、強調されるようになります。なぜならば、『聖書』は、世界のすべての始まりは、主なる神様による天地創造の出来事であると明言しており、もし、世界の終わりがあるとすれば、当然その終わりにも主なる神様が関わると思われるからです。

それでは、その終わりは、どのような状態になるのか、このように終わりについて考えた時、そこにあるのは、無でも滅びでもなく、主なる神様を信じる者の勝利です。しかし、それはただ来るのではなく、苦難の後に来る、だからこそ、逆に、今ある苦難は、完全な勝利へのしるしである。そのことがこのダニエル書に記されているのです。「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろうお前の民、あの書に記された人々は」（ダニエル 12：1）という言葉は、そのことを示しています。またその後続く、「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」（ダニエル 12：2）という表現は、最後の審判や、イエス様が教える復活の命に近い表現と言えます。

「ダニエル書」の5節以降は、[]にはっていますが、そこではダニエルが見た不思議な幻の描写があります。具体的な描写の一つひとつ、あるいは日数などの意味ははっきりわかりません。しかし、「終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう」（ダニエル 12：13）という、「ダニエル書」全体の末尾にあることばには、最後は大丈夫なのだという安心感があります。

この「ダニエル書」に見られるような黙示が、その後、ユダヤ教の信仰の中心になったのかというと、そうではありません。預言活動は、以前ほどではありませんが継続して行われ、律法の実践がより重要視されたからです。また、イスラエル・ユダヤ人たちは、シリアに対して反乱を起こし、もう一度王国としての自治を確立し、主なる神様を信じることへの迫害はなくなったからです。その王国が、イエス様の時代ぐらいまで続く、ヘロデ大王などが統治したハスモン朝です。しかし、その王国は、決して安定したものではなく、様々な意味で不安定なものでした。そのような中で、イエス様は、活動され、十字架にかかり、すべての人に向けられた神様の愛と、復活の命を示したのです。

イエス様がそのような歴史の中で登場された意味は、「ダニエル書」が語るような、イスラエル・ユダヤ人たちに向けられた、苦難の後に来る本当の勝利・命と全く同一ではないとしても、信仰者に希望を語っているという意味では同じです。言い換えれば、旧約に示されたイスラエル・ユダヤ人の歴史を踏まえた希望が、イエス様という一人の人間の中で、具体化したのです。預言でも黙示でもなく、より分かりやすい歴史的な出来事として、復活の命、永遠の

命が、すべての人に示されたのです。わたしたちが今も教会の信仰を通して信じているのは、その希望と命です。

さて、イエス様の活動と十字架と復活以降、世界がすべて主なる神様の意志にかなったものとなればよいのですが、そうではありません。イスラエル・ユダヤ人たちは、イエス様の出来事の後、ローマ帝国に反乱を起こします（66年から73年）。70年にはエルサレムが陥落し、マサダでは73年まで抵抗が続きました。最終的に、イスラエル・ユダヤの人々は、集団として二回目の滅びを経験します。「マルコによる福音書」が書かれたのは、その戦いの前だと多くの研究者が考えますが、わたしもそのひとりです。イエス様がその戦争を予期していたかどうかはわかりませんが、イスラエル・ユダヤの地域にあった誕生間もない教会は、周囲がローマ帝国との戦いに入りつつ中で活動していました。「マルコによる福音書」が、イスラエル・ユダヤの地域で書かれ、戦争に突入する状況が直接執筆に影響したと断言はできませんが、教会の歩みが始まって、世界には争いや苦難が終わらないということを、認識していたことは確かであると思います。

本日の福音書の箇所は、その「マルコによる福音書」の中でも、小黙示録とも呼ばれる部分の一部です。本日の少し前に「戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけません。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである」（マルコ13:7-8）とあります。これらは、先に触れたローマ帝国との戦いと無関係ではないと思います。しかし、その箇所の結論は、「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（マルコ13:13）とあります。いろいろなことがあっても、最後までイエス様を通して主なる神様への信仰をもって耐え忍ぶことが大切であると語られているのです。本日の箇所は、これらの後に続いています。

「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ——」。この部分は、破壊者とはだれかということも疑問ですが、「読者は悟れ」と福音書の著者が思わず、物語の世界を超えて、直接読者に語りかけてしまった、聖書の中でも珍しい箇所です。それほどまでに、注意を呼び掛けなければならないような苦難が来る、「それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである」とある通りです。しかし、それはただ不安をあおる言葉ではありません。「主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われぬ。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである」とある通り、苦難の目的は、救いにあるからです。苦難の後に来るのは、本当の希望・永遠の命に他ならないからです。

この信仰は、簡単には受け入れられない事柄かもしれませんが、個人のものであっても、社会全体のことであっても、苦難などない方がよいからです。ある

いは、苦難などがなくなってほしいから神様を信じているともいえるからです。実際、イスラエル・ユダヤの人々の歴史も、その苦難からの脱却のための歩みといえます。しかし、苦難はなくなることはなく、またイスラエル・ユダヤ人たちの信仰がなくなることはありませんでした。それは、彼らが主なる神様が模範とした民であるからです。つまり主なる神様が、自らの民の苦難の先に、真の救いがあることを示すための模範なのです。その世界の歴史の中における、壮大な神様の救いの出来事は、今も続いています。しかし、主なる神様は、もっとも分かりやすい模範、一人の人間の生き方を通した模範、それを示して下さいました。それが、イエス様の十字架と復活の出来事です。

イエス様の生涯と十字架は、わたしたちに常に問いかけます。もし世界に苦難があるとすれば、それが自分の苦難であれ、他の人の苦難であれ、そこに何を見出すかという問いかけです。自分の苦難にただ絶望することか、他者の苦難を見て、自分にそれがないことを確認して安心することか。イエス様の示した十字架はそのどちらでもありません。イエス様の十字架の姿は、自分や他者の苦しみに対して、それを解決するための力と知恵を与えます。その知恵と力とは、たとえ苦難が続いたとしても、主なる神様が本当の希望と命を約束して下さいているという確信に基づいています。つまり、主なる神様にすべてを委ねるがゆえに、自分たちの歩みが、人間の思いと努力を超えた出来事につながるという確信です。使徒書の「ヘブライ人へ手紙」も状況は異なりますが、同じ確信について「この確信には大きな報いがあります。神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです」と語っています（ヘブライ 10：35-36）。

イエス様の時代以前から、イエス様の十字架と復活の出来事、そして、現在に至るまで、混乱と苦難は世界各地で続いています。それは、人間が引き起こす戦争や分裂のような現象だけではなく、自然災害や異常気象など、天変地異を含めたものもあり、また今わたしたちが直面している新型コロナウイルスなどもあります。わたしたちは、そのような世界が、可能な限り良い世界となるように、祈り、努力しなければなりません。しかし、それがすぐに実現しなくても、決して不安に陥ることはないのです。「**主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われぬ。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである**」とある通り、主なる神様の意思は、すべての人に救いを与えることに他ならないからです。

もうすぐ教会の暦や一般社会の暦が変わります。暦は変わっても、社会では同じことが繰り返されるのかもしれないかもしれません。しかし、その歩みの中で、わたしたちが、『聖書』、そして教会の交わりから見出すことは、主なる神様の愛です。その愛をわたしたち自身大切に、その愛に守られて歩んでいきたいと思えます。悲しいことが世界に繰り返されることのないように願い続けるのですが、たとえそうであったとしても、その先に真の希望と命があることを示し続けたいと思えます。